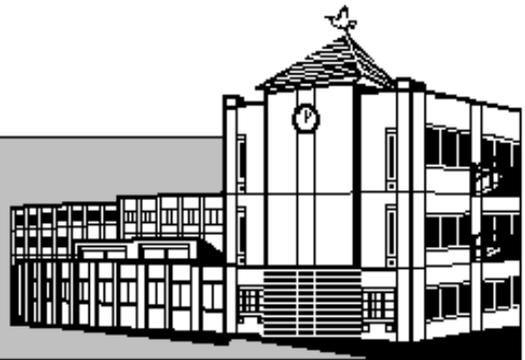


図書館だより



2003年度 第2号 (2003年12月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

目次

鶴岡のクリスマス.....	学長	新井 明 (1)
ブリューゲルの一枚の絵.....	英語英米文学科長	北嶋 藤郷 (2)
頭 < 感覚.....	英語英文学科3年	近 可奈子 (3)
新刊案内.....	前学長	北垣 宗治 (4)
共生社会学科のための図書紹介.....	国際文化学科教授	石川 喜一 (4)
事務室より.....	図書館長	柴沼 晶子 (4)

鶴岡のクリスマス

学長 新井 明

手もとに一冊の古い古い英訳聖書がある。よく使っていて、ボロボロになっている。Akira Arai という自署と March 27, 1947 という日づけが記入してある。

もう 56 年以上も昔の聖書ということになる。これは山形県鶴岡市の荘内教会で小川永水（はるみ）牧師から頂戴したもので、わたくしにとって洋書第 1 号である。頂戴したのは太平洋戦争の敗戦を迎えて、2 年はたたないころのことであった。

山形県立鶴岡中学校（旧制。現、南校）で、戦争中から戦後にかけて、わたくしたちに英語を教えてくださいました先生は嶋田昇平という方であった。その先生が、あの敗戦の翌年、1946 年（昭和 21）のクリスマスに、きみも教会に行ってみないか、と誘ってくださった。先生の後について、教会という所に生まれて初めて足を入れた。そこでのクリスマス礼拝は、日蓮宗で育ったわたくしにとって、表現がたい光景であった。嶋田先生はさらにその翌年、1947 年の春の復活節に、小川牧師から洗礼を受けた。こ

れは、わたくしにとって、さらに異常な目撃体験となった。いまでも脳裏に焼きついて離れない。14、5 歳のころのことだ。

こうして教会に出入りしたことが契機となり、1947 年の 3 月に、小川牧師はあの英訳聖書をわたくしに下さることになる。ただ下さただけでなく、その読み方を教えてくださることになった。（のちにわたくしが察したことであるが、これは嶋田先生が小川牧師と相談して、一少年に英訳聖書読解の機会をあたえてくださったものであろう。）小川先生は「マタイ福音書」の始めから、一節一節をたんたんとして英語で読み、それを日本語に訳し、説明し、質問に応じつつ、急がずに先に先に進んでゆかれた。お若いころ、アメリカで勉強をなさったというのは嘘ではない、見事な発音であった。曜日は思い出せないが、毎週一回の夕飯後の、やく 2 時間であったと思う。冬になると、この勉強に使った教会堂は、火がないではすまされなかった。ひどく寒かった。鉄のストー

ヴそのものはあるのだが、そこにくべる薪(たきぎ) - タキモノと言っていた - がなかった。いまのような暖房施設のない時代であり、薪は貴重だった。「疎開者(そかいもの)」であるわたくしの家に、余分の薪があるわけがない。どこかへ行って、タキモノの工面をし、それをかついで教会堂へ回った。もうひとり、熱心なご婦人で、ときにこの読解の時間に加わる方があったが、その方も冬は同じように燃料持参で、教会堂を訪ねてこられた。人数がひとり加わることで、それだけ教会堂が暖まり、その暖かさも長く保たれることになった。多くて3人の集まりであった。

小川牧師がわたくしに下さった聖書は 1611 年訳の、いわゆる欽定英訳聖書である。シェイクスピア時代の英語訳であり、現代からみれば、すでに古いことばによる訳である。が、名訳の評の高い文体となっている。じじつ、英語文化圏におけるこの英訳聖書の影響は大きく、近代英語の基礎となったというのが、定説である。ジョン・パニヤンの『天路歷程』や、リンカン大統領の名演説なども、この聖書がなければ生まれなかったであろう。リンカンなどは少年時代、その丸太小屋で熟読した本といえば、両親がもっていた2冊の書物しかなかった。それは、このパニヤンとこの聖書の2冊であったといわれている。

小川牧師がその聖書を読んでくださったことは、わたくしの一生に深い影響をとどめることになる。聖日に教会の礼拝に出るというところにまでは行かなかったが、聖書そのものには親しみがいただけるようになった。もし鶴岡があたえてくれた聖書への接近の機会がなかったとすれば、わたくしはとんでもない方向へと歩み出していたかもしれないのだ。

敗戦後、青年たちは母国のかつての歴史が誤りであったことを知り、混迷と退廃の時期を過ごす。多くの青年たちが社会主義への道を選んだ。わたくしの場合も、鶴岡時代の愛読書は共産党の指導者・徳田球一の『獄中十八年』、それに尾崎秀実(ほつみ)の『愛情はふる星のごとく』であった。尾崎のばあいは、真に国を愛する精神に立って、ソ連の諜報員リヒャルト・ゾルゲとかかわりを持ち、それが発覚して逮捕され、裁かれ、敗戦をまたずに処刑された。あの十五年戦争中にも日本の軍国主義に反抗して、「神国」日本を超えた別の道を模索した人びとがいた、という事実は、わたくしに深い感銘をあたえた。わたくしの時代は第一次全学連の結成期であった。友人たちの多くが、その方向をたどった。

内村鑑三の名を知ったのは、英訳聖書を手にした後、2, 3年たったのことである。そのころ神奈川県湘南に居を移していた。岩波文庫版の『余は如何にして基督信徒となりし乎』を手に入れて読んだ。(ある先生が教室でこの著者のことを語ってくださったことが契機となった。)一武士の子が、札幌農学校に学び、キリスト教に接し、日本的な福音理

解をいただくにいたる。聖書一巻をもって生き行くときに、この社会、この日本、この世界を新生へと導く原動力があたえられる。“I for Japan, / Japan for the World, / The World for Christ, / And All for God.”(われは日本のため、/日本は世界のため、/世界はキリストのため、/そしてすべては神のために。)この内村の門下から、南原 繁、矢内原忠雄らの反戦主義者が出たことも、後になってから知った。これらの人びとの著述、それに塚本虎二の著作による影響を受け、学生時代を過ごした。聖書は社会主義いじょうのことを教えてくれるという確信をいただくことができるようになっていった。

東京の大学を卒業したあとで、内村鑑三が出たアマースト大学(Amherst College)へ呼ばれることになる。そこで2年を過ごしたあとで、こんどはミシガン大学の大学院に入った。そのどこへでもいっしょに付いて来てくれたのが、あの小川牧師が下さった英訳聖書であった。ポロポロになるはずである。帰国したのちに名古屋の大学に勤めた。

その名古屋時代に、1967年5月のことだが、東北学院大学で学会があり、わたくしもそこでなにかを発表した。その帰途、最上川ぞいに日本海側へ回り、鶴岡に立ち寄った。ひとつには、小川牧師の教会を訪ねたかったのだ。お別れしてから、20年ちかくもたっていた。奥様が出てこられて、やっとのことで「新井」という名を思い出してくださった(と思う)。そして、言われたのは、「牧師は先だっけのクリスマスのまえに召されました」。わたくしはがっくりして、声もなかった。少ししてから、牧師夫人は言われた、「新井さん、お上がりになって、霊前にお線香をあげてください」。わたくしはそのことばに従った。この教会堂でおこなわれたあのクリスマス礼拝、洗礼式と、その後の「マタイ福音書」の講読が、わたくしの一生を決めたのだ、と反芻しつつ、教会を去った。

新発田に住むようになってから、まず訪ねたいと願っているのは、鶴岡である。海岸にそって、北へ100キロも行けば、庄内の地なのだ。しかし、新発田での多忙さは、いまだわたくしにその日をあたえてくれない。



ブリューゲルの一枚の絵

英米英文学科長 北嶋 藤郷

敬和学園大学図書館に「中野文庫」があることを知っていますか？そしてこの「中野文庫」が収蔵されている近くの白壁に、最近ブリューゲルの一枚の

絵が飾られているのに気づきましたか？

「1996年春のウーン、それがブリュゲルとの最初の出会いだった。そのとき以来わたしはほぼ一年間の滞在のあいだ、おんぼろVWを駆って、この画家の絵がある都市をつぎつぎに追いかけることがヨーロッパ滞在の目的のようになってしまった」と中野孝次氏は『ブリュゲルへの旅』の中で述べている。

ぼくはこの絵の魅力に呪縛されたように、毎日閉館近い静謐の時間帯に図書館を訪れている。ドイツの金熊賞に輝いた、アニメ映画「千と千尋の神隠し」の世界に見られるように、さまざまな魑魅魍魎が跳梁跋扈している。魚、鼈、蛇、イモリ、蟾蛙、鳥、ザリガニ、蜘蛛、その他の混成怪物たちが城壁の上、堀割りの中、地上のいたるところに奇妙で懸念なバトルを展開している。魔物たちは、人間の足を飲み込み、あるいはハーブをひき、跳ね回っている。ハムレットの台詞を援用すれば、この世の関節が外れてしまっている。暗褐色を基調とする暗い絵ではあるが全体を構成する個々のイメージは優れて明晰である。

頭巾を巻いた女たちが魔物を打ちひしんでいるが、「だがその女たちの十倍もある巨大な狂女は、もはや略奪にも地獄征伐にも無用と、長大な剣をつきつけて、画面を左に闊歩しさろうとしている。鉄兜の下の愚かしげな思いつめた顔は口を開け、目をひたと前に据え、腕にかけた籠にはフライパンや宝石箱がつめこまれている。そして地上には猛火が空を焼いている」(中野孝次著『ブリュゲルへの旅』3 狂女より引用)

ぼくは1975年、ニューヨークでブリュゲルの「麦刈り」を見た。ぼくの生まれ故郷の原風景は農村地帯であるので、この絵の労働の中休みをする農民と大地との深く結びついた合体感は、一種の共感と癒しを与えてくれた。豊饒な大地は農民の厳しい労働に見合うだけの実りをもたらしてくれるのだ。

著名な作家兼ドイツ文学者である中野氏は、「ニューヨークでは一枚の「麦刈り」を見ただけでもうこんな町には用はないと思ったくらいである」と書いているが、ぼくは英語畑の一学徒であり、アメリカの文化・文学の底辺を日々忙しく駆け巡っている人間であるから、ニューヨークは好きでたまらない。アメリカはよく人種の坩堝といわれるが、この大都会には、美も醜も含めて、アメリカのすべてが包蔵されている気がするからである。そしてメトロポリタン美術館で、この黄褐色の熟麦の絵に出会ったときの一服の清涼剤のような爽やかな記憶はいまもぼくにある。(この「狂女フリート」の絵は本年9月アントヴェルペン市のマイヤー・ファン・デン・ベルク美術館を訪問した上田茂氏の寄贈による。

上田氏は大学時代、中野孝次先生のドイツ文学の優秀な弟子であって、その濃密な師弟関係は現在に至っている。上田氏の令嬢の純子さんは、本学の卒業生である。)



頭 < 感覚

01E037 近 可奈子

もし、自分に石が飛んできたらどうしますか？ けがの一つや二つとと思ってけがをしますか？ 中にはその石をキャッチする人もいるかもしれない。けれど、多くの場合はその石を避けるでしょう。けがはしません。人間はその石から身を守るのです。なぜでしょうか。

人間は、幸せになるために生きているからです。

先日、占いの館に行ってきました。そのときに占い師に言われたのがこのことです。その占い師は、オーラ鑑定という占いをしてくれました。オーラ鑑定とは、その占い師と両手を合わせ、私の中のオーラを引き出し、イエスだったら手が暖かくなり、ノーだったら手の熱が消えていくというものでした。例えば、「自分は24歳で結婚できる。」と何回も唱えて自分の手の熱が暖かくなるとイエスで、熱が消えてしまうとノーであるといったように、自分の意識に上っている自分ではなく、もっと奥深くに存在している、自分の意識に上ってこないような自分に、オーラでもって聞いてみるという鑑定でした。

でも私には一つ疑問が生まれました。なぜ「今の自分の状況がこうで、本当はこうしたいと思っているのだ。」という答えなら分かるが、なぜ「あくまで同じ自分が未来のことも知っているのだろうか」と。このことを友人と話していたら、友人がこう言いました「... もしくは奥深くにいる自分が全て知っているのではないかと。鋭い。

これは仮定に過ぎないが、本当に自分がよりよく生きるための方法を知っているなら、私たちは、頭でもってではなく、感覚を大切に生きていくべきだと心底思いました。やらされていることじゃない、自分がどんなに好きでどれだけ熱中できて、どれだけ充実感が味わえるか。これが一番大切なことだということ。自分で「よりよく生きているか」なんて、頭で考えていても仕方がない。自分が楽しいと思えることを今やっているかどうか。これが幸せに続いている。感覚が無ければ、幸せを感じることも無い。感覚でもって楽しいと思うことをやり続けていれば、まだ自分の幸せの道からは反れていない。

楽しいと思うことをしましょう。何が幸せかなんて自分が一番知っている。

新刊紹介

加藤修・北嶋藤郷『アースキン・コールドウェル研究』（奥村印刷出版部、2003）

前学長 北垣 宗治

フォークナー、ヘミングウェイ、スタインベックらの活躍した時代は、二十世紀アメリカ小説の黄金時代だった。彼らに伍して作品を発表し、独自の境地を展開した小説家にアースキン・コールドウェル（1903—1987）がいる。四人の共通点はすぐれた長編小説だけでなく、同時にすぐれた短編小説を書いたことだ。

アメリカ南部を背景としてフォークナーは『八月の光』のような作品を書いたが、コールドウェルの『タバコ・ロード』と比べる時、どちらもアメリカ南部の物語でありながら、ニュアンスは大いに異なる。フォークナーがドストエフスキーを思わせるような人物と状況を創造したのに対し、コールドウェルはその独特のユーモアと悲喜劇的雰囲気においてシェイクスピア的である。貧しく、無知で、子沢山で、空腹であるのに、父祖の土地を離れようとしない小作農民。読者は作中人物のむき出しの愚かさに笑いを誘われるが、自分もまた一皮むけば同じ愚かさを持っていることに気付かされる。

『タバコ・ロード』の家族には親子の情愛がまったく欠けていて、その不条理性は徹底している。レスター夫妻の十七人の子供は五人が病死し、十二人が生きているらしいが、現在家には二人の子供だけ。食べ物も与えられず、粗末に扱われながら文句もいわず生きてきたレスター家の祖母は、孫の乱暴な運転のため事故死するが、それを誰も悲しまない。家を出て行った子供らは親に送金しないし、居所さえわからない。親たちは息子や娘の情事をさえのぞき見しようとする。

長年コールドウェル研究に取り組んできた加藤修・北嶋藤郷の両氏が、コールドウェルの生誕百年を記念して本書を上梓した。加藤氏が短編・長編小説の概説と作品論を担当し、北嶋氏はノンフィクション、書誌、年譜を担当し、本書はこの優れた南部作家の全貌を見事に伝える。なおコールドウェルは生前三度来日しているが、三度目のとき成田空港に単身夫妻を出迎えたのは北嶋氏であった。その時の心温まる回想記が印象的である。



共生社会学科のための図書紹介

国際文化学科教授 石川 喜一

来年4月には新設予定の共生社会学科に初めての学生を迎えることとなりました。新学科では学生諸君はキリスト教精神に基づいた社会福祉、ボランティア、介護、ケアなどについて学習します。卒業時には社会福祉士の国家試験受験資格がとれるようなカリキュラムが計画されています。教員は熱意をもって教育に当たり、学生諸君には落ち着いて勉強してもらい、必ずや隣人愛に満ちた社会福祉士を多数誕生させたいと念願しております。

大学としては新学科における教育がスムーズに行くように文科省に提出した申請書の計画に従い準備をしております。図書館にも社会福祉関係の図書を約千冊ほど購入して共生社会の学習に備えることになっておりました。そこで、共生社会学科担任予定教員が相談して、それぞれ100冊をリストアップしました。さらに紀伊国屋書店にお願いして社会福祉関連の学科をもつ大学図書館が備えている基本図書をリストアップしてもらいました。それをチェックして最終的に購入する図書を図書館委員会で決定致しました。

目標は千冊、平均単価二千元と考えて、費用は200万円です。12月2日現在で592冊（約170万円）が購入されました。「社会福祉原論」や「社会事業大系」といった全集ものや辞書類が多かったので予定よりちょっと単価が高くなりましたが、これらの図書は新学科の教育に大いに役立ってくれるものと思います。新学期が始まるまでには目標に達するように図書館では努力しております。



事務室から

図書館長 柴沼 晶子

クリスマスの思い出の図書、このたびは新井明学長の中学時代の『欽定英訳聖書』との邂逅です。学長のクリスチャンとしての確固たる信仰に培われたお人柄と Keiwa Authors の書架にあるミルトンをはじめとする研究書から窺える深い学識の原点がここにあったことを教えられました。

『コールドウェル研究』も Keiwa Authors の書架にあります。この機会に先生方の生命をかけられたご研究に目を留めてください。

新着の共生社会学科の図書は他学科のみなさんのボランティア関係科目や資格のための勉強にも役立つものです。